

戦後の北海道における保育者養成と実践教育

— 奥田三郎・稲垣是成・留目金治の実践と羊丘藤保育園設立の経緯から —

吾 田 富士子

1. はじめに

本論は、1960～1970 年代に藤女子短期大学保育科に在職し、保育者養成に関わった奥田三郎と稲垣是成、留目金治を取り上げ、その学問的背景と足跡をたどりながら、戦後の北海道における保育者養成の一端を明らかにすると共に、今日の保育者養成や保育者の専門性向上に必要な視座を得ようとする試みである。

奥田三郎は、周知の如く日本の精神医学、治療教育学、知的障害児教育学の草分けで、1946 年北海道家庭学校の校医となり北海道庁の嘱託遠軽保健所長として来道した。以来、北大教育学部教授として研究と教育にあたりると同時に、北海道内の障がい児の教育及び医療現場での療育実践とその指導的役割を果たした。

稲垣是成は戦後、北海道庁職員となり、初代児童課長、教育長等を歴任し、北海道の福祉行政の基礎を築いた医学博士である。

留目金治は、女子厚生施設（救護院）である北海道立向陽学院の初代院長として全国初の小舎制を実践した。北海道中央児童相談所長、北海道立保育専門学院院長を担う中で、留目は常に現場経験を生かした。

北海道の教育・医療・福祉に大きな功績を果たした三者は、実践から教育理論を構築、それを晩年には藤女子短期大学保育科において保育者養成に反映させた。特に、障がい児保育と保育者養成に必要な教育と研究の場としての保育園設立の経緯から今日の保育の質向上への手がかりを探りたい。

2. 奥田三郎（1903-1983）の人間観と学問的背景

奥田三郎に関しては、その著作と活動業績を分

析し、かつ北海道立特殊教育センターに保管されている奥田三郎所蔵資料を解読、北海道の知的障がい児教育実践史の観点から分析した市澤らによる実証的な継続研究がなされている¹⁾。本論では、奥田の生涯を概観し、その学問的背景と、奥田の生涯に影響を及ぼした人物のうち、北海道で様々な研究会を共に担った留岡清男と城戸幡太郎に着目し、彼らの教育に対する姿勢から、奥田の人間観にふれる。

2-1 哲学から心理学、精神医学へ

奥田三郎は、1903 年現在の旭川市に誕生、外交官を志望して東京市第一高等学校文科甲類に入学したが、自らの生に煩悶する中で、人間の生を究明する学問と信じた哲学に熱中し、1922 年東京帝国大学文学部哲学科に入学。1 年後、奥田の関心は観念よりも、人のリアルな心の作用に焦点化され、心理学科へ転科した。しかし、当時の心理学は精神動作学が中心で、人間の心の奥底の動きを究明する臨床主体の学問ではなかった。中・高等学校教員資格を得て同学科を 1925 年に卒業するが、奥田の学問的関心はさらにクレッチマーの書物をきっかけに、精神医学へと移行する。その背景には精神病を発病した姉の存在もあった。東大への学士入学が不可能となり、東京慈恵医科大学精神病理学科に入学、1931 年医師免許取得、東京帝国大学医学部精神科介補員、教室員を経て 1932 年松沢病院医局員、1940 年には同病院院長、医学博士となったのは 1943 年である。

奥田は、同病院で知的障害児と出会い、また恩師と仰ぐ児玉昌^{ミカサ}（1892-1953）との親交が始まった。そして、児玉が 1930 年に私財で設立した小金井治療教育所の経営と実践を 1932 年から 1945 年まで受け継いだ。また、石井亮一が創設した全国初の知的障害児施設、瀧乃川学園を支え、石井没後は『石井亮一全集』の編集を独力で行う等、石

井に対する敬愛の思いも大きかった。児玉の人間観を奥田は次のように述べている。「生命と精神は現有の科学的方法では対象化し組織化できない基本的な性質を具有していることから、哲学的に考え、文学的に探るという方法で人の生そのものを全的にとらえ体得された生命哲学的人間観を基本としている」²⁾。また、石井亮一の人間観については「熱烈なキリスト者として愛の精神に徹して挺身するキリスト教に基づく人生観」³⁾としている。このような恩師の人間観は、奥田のその後の実践と人間観に大きな影響を与え、戦後の北海道の障がい児教育や療育、保育者養成をも動かすこととなる。

市澤は、奥田の学びの時代を「人間理解学形成期」と位置づけ、病院や療育現場での実践期を「治療の人間学論形成期」と分析している。さらに、奥田は東大医学部講師をはじめ、東京での全ての役割を辞して1946年から1949年まで、北海道家庭学校の校医と北海道庁の嘱託遠軽保健所長として遠軽で過ごす、この時期を「人間学静観期」とした。

1949年北海道大学文学部教授、翌50年には教育学部教授、特殊教育学・教育衛生講座主任に就任。1952年、幼児教育の研究と地域社会の要望に沿う形で北大幼稚園を開設。札幌啓生病院や岩見沢清丘園経営、札幌養護学校設立や北海道の社会福祉事業への専門的な支援等を行った。このように東京での実践を理論化し、北海道で具体的な教育・福祉活動やその組織化に寄与した。

2-2 留岡清男（1898-1977）の視座：人間の生活

奥田には東京帝国大学文学部心理学科の先輩に城戸幡太郎と留岡清男が存在する。北海道大学での研究・教育を共に担い、互いに影響を与え合った関係にあるが、ここでは奥田と留岡清男との関係を示す「留岡君と家庭学校」⁴⁾から抜粋する。二人の親交は奥田が卒業論文で使う文献を留岡に借りた1925年から始まる。留岡は城戸幡太郎の要請で法政大学に勤務、1929年に父幸助が創設した北海道家庭学校教頭に赴任、父没後、教頭を辞して法政大学に復職、城戸と共に岩波講座『教育科学』刊行をはじめ、雑誌『教育』創刊、全国組織である「教育科学研究会」を結成、岩波『教育学辞典』をも刊行した。

奥田によれば、留岡は「元来、社会問題に対す

る関心は強く、しかも、研究意欲と能力とは他に抜きん出ている。ことに、現実即して、広い展望の下に、問題を分析し、中核を洞察するのに秀いでいた。そうして、サナブチ三年半の実践生活は、彼に生鮮な血肉の裏打ちを与えた」⁵⁾であり、教育科学運動時代が最も充実感や満足感を味わった時期であった。また、満州への衛生事情視察の際、名所旧跡をする奥田に対し留岡は郊外の開拓団の事情を視察するなど、「留岡の関心は、生きている人間の生活そのものに、はっきりした焦点を結んでいることに、改めて感服した」とも述べている。

その後、北海道で終戦を迎え、9月には職員の求めで家庭学校に赴くが、1929年、家庭学校の第4代校長となるまでの数年が、「留岡の煩悶時代」と奥田はみている。幼少時の母との死別、卒論制作中の親友の自殺、爆弾への恐怖から生死を達観超越できていない自身への自己嫌悪等から、「今まで経て来た人生経路も、時勢の急変も、そして、人の世をすこしでもよくしようと努力した活動の空しかったことも、作用しているのかも知れない」と奥田の目には映った。「この自己挫折感に抗するように、留岡は家庭学校では、土方作業に精を出し、また、遠軽町を中心とした新しい形のセルメント活動を構想し、村づくりに残りの生命を燃焼させようかと考え、友人たちを勧誘したりした。」と振り返っている。そして、「何でも人の役に立つことを通じて、自己完成、自己鍛錬を重ねなくては、との覚悟で精進の決意をかため」家庭学校の再建にあたる。奥田にとって「少し怖い兄貴みたいな」存在の留岡は、「クリスチャンだが、神の愛の前に無力なる自分を投げ出す救いを求めてはいないようだ。仕事を通じての自己鍛錬、その精進による自己完成、そこには、禅の修行に通ずるきびしさが認められる」とし、生活と労働を通じた教育実践をしていた彼の生涯が、深い親交の中で奥田の人間観に与えた影響は大きいだろう。

留岡と共に教育科学運動を展開した城戸は、「彼の心理学は人間の価値を問題とする心理学であり、従ってそれは教育を問題にする」⁶⁾とし、「教育の生活主義と科学主義」を家庭学校での実践の中で徹底しようとしたと述べる。後に北海道大学教育学部社会教育講座担任教授として、留岡が上士幌や女満別で実施した農学校を中心とした地域開発は生活教育論の実験であり、この農村開発の教育

計画が家庭学校の教育実践を有効にしたととらえる。「彼の思想は教育と福祉の一体化によって人間的行為の善悪を超越しようとしたので、そこに彼の教育者としての人格が表現されていた」⁶⁾とし、家庭学校での校長としての実践と北大教授としての教育がヒューマニストであると同時に科学者としての合理主義者であって、そこに城戸は教育科学者としての留岡をみている。

2-3 城戸幡太郎の教育観と教育の科学化：北大幼児園開設と保育問題研究設立

北海道大学の教育学部立ち上げに際し、城戸は奥田と留岡を構想に入れ、教員養成を行う北海道教育大学に対し、北大では研究者養成と教育指導者養成を中心に、教育の研究に焦点をあて、北海道の教育計画に科学的基礎を与えることとした⁷⁾。城戸は石川譲の教育学やカント哲学等の影響を受け、ナトルプ研究やドイツ留学の中で、社会教育学に共鳴、教育の科学的研究の必要性から教育科学研究会、児童問題研究会、保育問題研究会等を組織した⁸⁾。

また、北海道大学教育学部設立に関し、城戸は「教育科学と教育計画」の中で次のように述べている。「日本での教育科学運動が教育の科学主義だけでなく特に生活主義を標榜したのは昭和11年頃の東北、北海道の冷害を留岡清男と視察して、教育は農民の貧困を救う事ができるかを考えさせられたため、国民の生活問題の解決は単なる没価値的な科学的方法だけでは解決できず、そこには国民の社会問題があり、それを解決するためには自然科学の方法だけではなく社会科学の方法をも問題にしなければならず、従ってそれは政治、経済、文化にも係わる価値を問題にしなければならないのである。」⁹⁾ ここには城戸が北海道開発に焦点を定めた理由と教育の可能性を賭けて北大教育学部設立を図ったことが示されている。

北大教育学部の特殊教育講座は、全国初の総合的な特殊教育講座であり、1951年、奥田の推薦で道立教育研究所から本講座の助教授に就任した木村謙二らと臨床経験の長い奥田が中心となり、実験保育研究の場として1952年、北大幼児園を開園した。後に北大教育学部助手となり、この幼児園での研究を担った三宅和夫は、城戸の子どもの問題を解決するための強い信念を、この幼児園に見出し次のように述べている。

「先生にとっては問題を解決するためには実行が必要であり、理論的に基礎づけられるのを待っていたのでは事は進まないであって、実行するうちに真の解決を必要とする問題が発見されてくるので、それを確かな方法で解決していくのが学問ということになるのである。また先生は子供のことについて心配しているからこそ子供のことを問題として研究をしようとする姿勢ができるのであり、子供をたんなる存在として、それをいわゆる科学的方法で明らかにしようという態度では子供の問題は解決できないということを主張しておられた。」¹⁰⁾

さらに、奥田は教育科学研究会（北大教育研究会）から特殊教育研究会を発足、教育研究者と教員養成を担うと同時に、特殊教育実践者への理論的実際的指導と助言を行った。既に治療的人間学論を形成し、精神病理的立場から事例研究等の科学研究の必要性を求めた奥田にとって、これらの実現は不可欠なものであっただろう。城戸の北海道における研究・実践は、留岡の生きている人間の生活に中心視座をおいた教育実践や、奥田の豊かな臨床経験から得られた知見と共に深められたととらえることもできよう¹¹⁾。

1956年、奥田は「子どもの自殺に思う」の中で、問題解決のために詳細な事例研究記録による原因究明をし、それを一般教育に反映させることを示唆している¹²⁾。これは東京での臨床経験および、北大幼児園での保育記録や事例研究の成果が背景にあると考えられる。また、奥田の研究室が幹事として行っている特殊教育研究会での北海道精神薄弱児育成会の活動にふれ、親の連絡を組織化し、施設や教育の拡充に努めていることも付記している。これは奥田らの臨床研究の充実と北海道教育委員会や他の行政機関との連携がこの時期に進み、今日の北海道の障害児教育の基礎となっていることを示している。

3. 稲垣是成（1908-1992）の福祉行政

3-1 略歴

稲垣は1908年富山に生誕、1932年北海道帝国大学医学部卒業、同外科第一講座勤務。1937年、札幌通信診療所医員を経て、陸軍軍医として召集される。戦後、1945年より北海道庁勤務。栄養改善医務を皮切りに、衛生部公衆衛生課等を経て、

1948年民生部初代児童課長となる。北海道胆振支庁長、北海道衛生部長、北海道教育委員会教育長等を歴任、1959年にはアメリカ国務省からの招待により2ヶ月間、アメリカ国内の知的障害児施設および肢体不自由児対策の実情視察を、翌年にはスウェーデン、デンマーク、フィンランド、ノルウェー、西ドイツ、イギリス、スイスの心身障害児対策の実情視察を40日間かけて行い、世界の障害児教育や行政の状況を目の当たりにした。その年に定年退職し、藤女子短期大学保育科教授として赴任、以来19年間、学校保健、健康、小児保健、保健体育講義等を担当し、学科主任、教務部長、学生部長等を担った。1984年、教育振興と社会福祉の推進の功績により、第16回北海道開発功労賞を受賞している。

3-2 現場主義と人材育成

稲垣は戦後北海道の衛生、教育、福祉の基礎を築いたが、稲垣が北海道の行政を担った当初は、戦後の混乱状況の中にあり、衛生、教育、福祉のいずれも急務の課題であった。戦後処理の課題山積の中、国の法整備と共に先見性を持って英断し、時に行政の縦割りの壁を越えながら、確実に課題解決を図った。その背景には、医学や人間の生理に富んだ医学博士としての知識と、戦時中の劣悪な環境下での経験があった¹³⁾。

また、全国でもいち早く衛生工学士を導入、その養成に北海道大学に掛けあった。公衆衛生に関してはマラリアの予防地域を増やす戦地での経験から、衛生工学士を全国でいち早く導入、その養成に北海道大学や文部省、厚生省にかけあったり、衛生教育や衛生思想普及活動にも力を入れた。その後、1974年、北海道公衆衛生学会初代会長となり、継続して力を入れた。

さらに、問題があれば即現場に赴き、「歩き回る支庁」と言われた現場主義と、5時になると道庁職員を集めて勉強会を開き、職員全体の意識向上を図ったことが、北海道開発功労賞受賞記念として刊行された『夢を追う定時制校長さん—稲垣は成先生の歩み—』に記されている¹⁴⁾。特に造詣の深い知的障害児の勉強会では、北大の奥田に講師を依頼、毎週の勉強会への参加依頼は困難と考え、当時次々に設立された各施設での事例研究を行い、それらに奥田にアドバイスしてもらう等の実践をしている。当時を振り返り、施設設立と児童相談

所への指導的立場としての奥田の存在の大きさを、行政の立場から見つめたのが稲垣であった。こうした研究熱心な姿勢と現場主義から、研究者や現場実践者との連携は強く、それが行政の縦割りの壁を越え、必要な実務を実行できた要因になっている。1950年、北海道保母養成所長を兼務した際には後述するように藤学園に保母養成所を委託し、その後の藤女子短期大学保育科の前身を誕生させた。

教育長時代も障がい児教育と教育全般の質向上の上で、人を育てることの大切さを主眼においていた。1957年、北海道初の公立の精神薄弱養護学校として北海道札幌養護学校が開校された背景に、稲垣の障がい児教育に対する深い理解と愛情、財政難を克服しての大英断があったことは今日においても極めて高く評価される業績である¹⁵⁾。

本学に赴任してからも障がい児教育に関する研究・調査に励み、1971年には北海道大学で行なわれた日本特殊教育学会第9回大会のシンポジウムの司会として「特殊教育研究の前進のために」というテーマで、本学に赴任していた奥田と、北星学園大学に赴任していた城戸らと討議している¹⁶⁾。

また、北海道公衆衛生学会設立後、1981年、学会の中で脳性麻痺の早期発見に関する調査研究を行ったり、1989年、北海道で行なわれた総合リハビリテーション研究大会では「日中のリハビリテーションのかけ橋」というテーマで国際障害者年日本推進協議会所属で講演をしている。

戦後期までの北海道の社会福祉活動の歴史の特徴には、①著名な社会事業家が存在する②医学・工学系の社会事業家が多い③行政関係者・教育関係者の社会実業家への転身があげられるが、①には奥田の名が、②③には稲垣の名が連ねられている¹⁷⁾。

4. 留目金治（1911-1987）の科学的教育

4-1 略歴

1911年生まれ、北海道帝国大学内第16臨時教員養成所を卒業し、1932年より釧路高等女学校教諭。横須賀海兵団に入隊し、終戦後新制高等学校の釧路江南高校教諭に復職、1951年退職。同年、北海道立向陽学院院長、1961年より北海道中央児童相談所所長、1966年から北海道立保育専門学院院長、1969年より光塩学園女子短期大学助教授。

藤女子短期大学保育学科には1955年より非常勤講師、1970年より助教授として赴任、1977年教授。非常勤講師としては静修短期大学、北星幼稚園教諭保母養成所、道立衛生学院等で行った。1982年退職。担当科目は1955年の非常勤講師時代から担当していた施設管理に加え、児童福祉、社会福祉であり、学科主任も担った。

4-2 ケース・スタディと特殊教育

留目の著作は児童福祉の教科書と藤女子短期大学紀要にまとめた論文及び道立向陽学院長時代の「教護院の窓から『特殊教育』に思う」という論文である¹⁸⁾。この最も古い論文から、留目の教育観が示されている部分を、引用する。論文には特殊教育の扱う範囲が広く、そのため各行政機関が独自に運営し、一貫した総合的な教育行政に欠ける点を指摘、その事がさらに特殊教育行政の複雑化を助長しているとした。また、特殊教育という言葉に問題があり、個性に着目すれば、どの子どもも特殊と言え、自分には関係ないとしてとらえる教員も少なくなるのではないかと指摘している。

「…私のいいたいのは、特殊教育というとは何か普通教育とかけ離れた、教育の本道とは別なところを歩んでいる教育のように思われがちだからである。すなわち一般の先生たちは、特殊教育などはよほどの特志家か変り者でなければできない教育であり、われわれには無関係だといった感じがあったり、また特殊教育の担当者は誰にでもできる教育ではないんだという感じがあったり、相互にこのような雰囲気をかもしつつ、今後の特殊教育が進められていったなら、その発展に非常なマイナスになるのではないだろうか。」と述べ、特殊教育と言われているものが教育の本道から離れたものではなく、また特定の研究者や特志家にゆだねるものでもない、としている。

さらに、「科学的な教育こそ、このケース・スタディに外ならない」と述べ、「はなばなしい教育論にくらべて、こつこつと事例ごとに整理し、データを集めることは、たしかに地味な苦しいしごとかもしれないが、これが科学の正しい研究のあり方であり、これがあってはじめて最も科学的な、基礎的な教育資料が得られるものと信ずるのである。このことから思えば、特殊教育とは決して特殊な教育ではなく、真に教育を科学的に追及し、教育の正道をこつこつとまづたゆまづ歩んでい

る教育と思うのである。」と結んでいる。

これは留目が奥田の研究室に通い、事例研究につとめ、その実践と研究の中で見出した視点であろう。

また、留目は「養護学校とか、北大教育学部の教育衛生研究室などは、それぞれ特別な意味があるにしても非常にあたたかく感じられる。」としている。この論文を著した翌年、北海道大学で行われていた特殊教育研究会規約の中に、会長として奥田、幹事として木村の他に向陽学院所属の留目の名も連なっている。

5. 羊丘藤保育園設立（1975）へ

5-1 1970年代の保育学科専任教員：実際の学問・技術とカトリック精神による人間教育

表1は本学保育学科創設期から1980年代初頭までの教員の在職記録である¹⁹⁾。

1950年、当時の児童課長稲垣是成は「北海道保母養成所規則」を設け、北海道保母養成所長を兼任し、人的資源および経済的資源の乏しい中で保育者養成を行うにあたり、藤学園へ委託、牧野学長も保育者育成の必要性を痛感しており校舎提供、養成所の運営に当たったのが保育科の前身である。当時の教育課程表には「施設管理」科目担当者に留目金治の名が記されている²⁰⁾。1954年に開設した藤保育専修学校を経て1955年より短期大学保育科、1961年より幼稚園免許と保母資格取得という現在の土台が築かれた。専修学校開設に当たって「北海道大学の指導と承認を受けること」という附帯条項が付けられていたことが、奥田をはじめ、その後の心理学分野担当教員が北大出身者であったことと関連する。

奥田、稲垣、留目のうち保育学科に最も早く赴任したのは稲垣で、1960年である。学校保健、保育内容の研究・健康、小児保健、保健体育講義等を担当し、学科主任、教務部長、学生部長等を担い、1978年定年、その後3年間非常勤として勤務し、1979年より学校法人藤学園理事となる。次いで奥田は1956年より本学の非常勤講師として教職科目の青年心理を担当、北大を退職した1966年より本学保育学科教授就任、小児精神衛生や児童心理、養護原理、青年心理学や保育科演習を担当し、学科主任も担った。退職（1973年）後2年間、非常勤講師として科目担当を引き継いでいる。

表1 藤女子短期大学保育科歴代教員

西暦	1950				1955				1960				1965				1970				1975				1980									
昭和	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	
アンナ・メルテン																																		
レニルデ・シュレーデル																																		
奥田三郎																																		
鈴木重子																																		
吉武康子																																		
奥山わか子																																		
ザーレス・ウィアエル																																		
稲垣是成																																		
宇山銈子																																		
インゲブヒ・ディッセンバッハ																																		
小野百合																																		
松本幸子																																		
西千雅子(松野)																																		
沖津圭子																																		
留目金治																																		
石崎環子																																		
大畑耕一																																		
生富寛																																		
後藤昌彦																																		

※「藤女子短期大学 30 年藤女子大学 20 年記念誌」(1977)、在職記録、『学生便覧』(1963 年以降)より作表(薄い色は非常勤講師)

1970 年より藤女子短期大学保育科に赴任したのが留目である。非常勤時代から担当していた施設管理に加え、児童福祉、社会福祉、社会福祉方法論、ケースワーク、グループワークを担当、学科主任も歴任し、1982 年退職、以後 4 年間非常勤講師の記録がある。藤女子短期大学保育科に赴任した三者は、前項で明らかなように、それ以前から接点があり、彼らが本学の保育者養成の中で、それまでの豊かな経験を生かし、教育の科学化を目指し、実践教育を重視したのは明らかである。具体的には 1975 年の羊丘藤保育園の設立となるが、その構想は、留目が着任した 1970 年頃から始まったと考えられる。

ところで、当時保育学科には 8 人の専任教員がいたが、そのうち 4 人は修道女であった。教育心理学や保育原理担当の奥山わか子、藤幼稚園長を兼務し、保育原理や保育内容総論、教育実習を担当していた宇山銈子、絵画製作担当のインゲブヒ・ディッセンバッハ、そして音楽や音楽リズム、ピアノ担当の小野百合である。

奥山は、1928 年生まれ、藤高等女学校専攻科、藤女子専門学校生活科を経て、北海道大学教育学部へ編入、同大学大学院博士課程を修了、1955 年には当時の北大教授三宅和夫指導の下、北大幼稚園での研究を論文にまとめている²¹⁾。

宇山は 1926 年静岡に生まれ、静岡第一師範学校を卒業し、沼津市第四中学校(2 年)、北海道岩内町宮園中学校(1 年)、函館松川中学校(2 年)での勤務後、1951 年より藤幼稚園(3 年)、旭川藤幼

稚園(3 年)、岩手県一関市カトリック教会愛心幼稚園(1 年)勤務後、1959 年より藤幼稚園園長に就任、翌年より藤女子短期大学専任講師として兼職し、1981 年より学校法人藤学園理事長に就任している。

インゲブヒは 1930 年生まれのドイツ人修道女で、宇山園長時の藤幼稚園で子どもたちの保育に携りつつ、保育科教員を担った。

小野は 1916 年生まれ。藤高等女学校卒業後、東京国立音楽学校予科及び本科を卒業、道庁主催中学校教員理科臨時講習等で、数学と音楽の教員免許を取得している。1934 年岩見沢天使幼稚園勤務(1 年)、札幌幼稚園(3 年)、余市尋常高等小学校訓導(音楽科)(1 年)、札幌静修女学校(2 年)に勤務した。戦後は藤学園の教育に力を注ぎ、藤幼稚園(2 年)札幌藤中学校(2 年)、函館藤幼稚園(2 年)、北見藤幼稚園(4 年)勤務の傍ら北見藤中高を兼務し網走藤幼稚園園長(4 年 8 ヶ月)、美幌藤幼稚園園長(3 年 6 ヶ月)を兼務、旭川藤幼稚園教諭(2 年 5 ヶ月)後 1964 年より保育科講師として赴任している。

保育科設置目的の 3 本柱は①カトリック精神をバックボーンとした教育②保育者としての実際的な学問・技術付与③良き家庭婦人養成であった。①に関しては、専任教員に占める修道女の割合の高さが物語っている。②に関しては、既に述べたように奥田ら学外から着任された教員だけでなく、修道女たちの豊かな現場経験が教育に与えた影響の大きさは語るまでもないであろう。

そしてもう1人の教員は1967年より本学科に赴任した沖津圭子である。沖津は1928年に生まれ、藤高等女学校卒業後、北星高等女学校保育専攻科で幼稚園教諭免許を取得、その後、天使幼稚園（5年）小樽ローズ幼稚園（2ヶ月）、藤幼稚園（6年3ヶ月）、八雲マリア幼稚園（1年6ヶ月）、藤幼稚園（6ヶ月）、長万部マリア幼稚園園長（5年）、草加藤幼稚園（2年）、実に21年にわたる現場実践を経て本学に赴任した。最初の2年は藤幼稚園にて学生を受け入れる実習担当の研究助手として勤務したため、『学生便覧』には記録されていない。保育科助手を経て1970年より保育科演習担当、1972年より保育学講師となる。主な担当科目は、保育原理、障害児保育、乳児保育、保育実習、保育内容健康等である。1948年に保姆資格取得、1951年には『保育スーパービジョン』（学術図書出版）を著している（共著）。次に述べるようにこの沖津の存在がなければ、保育園の実践は困難だったのである。

5-2 奥田の指摘と設立に当たったの課題：実習園不足と保育実践者の不在

保育園設立に関する学科会議等での正式な記録は全く残されていないため、沖津圭子による覚書を参考とする²²⁾。

「実習園不足

保育科で幼稚園教諭二級普通免許状と保姆資格証明書を取得する。幼稚園教諭の実習は幼稚園があり園児に接している。保姆資格の場合、保育所がないので学生は保育所の子どもに接することができない。これでは保姆養成校として不備であるとの考えを持たれておりました。

また、学生がもっと幼稚園へ行って子どもの観察をするのが望ましい、と藤幼稚園と保育科の更なる連携を望まれ藤幼稚園長と話し合いを重ねましたが、藤幼稚園は大学の附属幼稚園ではない、マリア院の財産である、従って幼稚園は目的をもって日々保育を行っている。大学の計画通りに使用することはできない、との事情で奥田先生のお考えは通らず、保育所設立の必要性が強まり行きました。」（1-2頁）

藤幼稚園は短大が発足した1955年以降週に一度、学生に実習園として開放していたが、さらに

開放するには保護者の理解の面や子どもの情緒の安定面で困難であると当時の園長であった宇山が考えたことは推測される。また、藤幼稚園は1938年設立で、藤学園の中では藤高等女学校に継ぐ歴史があり、マリア院の財産を守らねばならないという修道女としての姿勢は当然であったかも知れない。幼稚園でも保育園でもない、北大幼児園での枠にはまらないあり方、研究者や学生がいつでも自由に参加できるオープンなかかわりは、長い伝統の中でもモンテッソーリ教育を取り入れつつあった当時の藤幼稚園にあつては困難であったことは想像に難くない。

現場では幼稚園が各地に設立され、保育の充実がはかれると共に、集団に入らない子どもの存在も注目され、相談が寄せられてもいた。こうした中で当時の学科主任であった奥田らの保育者養成の上での実習不足の指摘と、修道女であり藤幼稚園の責任者としての宇山の実習園としての藤幼稚園に対する確執は大きく、「学科主任は貴女がすべき」との言葉が奥田から宇山へ発せられたことが沖津への聞き取り調査でも、明らかである。

宇山は当時藤学園のみならず、札幌市私立幼稚園連合会や北海道私立幼稚園協会での研修や研究に邁進しており²³⁾、1979年には北海道社会貢献賞を受賞している。すなわち、その中心視座はあくまで子どもの生活にあり、保育者養成は周辺領域にあつたといえるだろう。

「集団に入らない子ども

終戦後、幼児教育の重要性が叫ばれ、幼児教育が年々増加を続けました。札幌市には仲よし子ども館が作られ²⁴⁾保護者の要望や子どもの喜びに応えました。保姆として働く卒業生から集団保育に入りにくい子どもの保育相談が寄せられるようになりました。」（5頁）

保育所保育を行う者には、さらに実践教育の必要性があることは自明である。特に対象児の年齢の幅が幼稚園に比べて広く、保育に欠ける子どもと、長時間生活を共にしながら保育する保育士には、当然多くの知識や課題解決能力が必要となる。机上の空論ではなく、常に実践の中から、事例を克明に記録し、科学的な検証の中で、いかに実践力を高めていくか、特に障がい児や困難な子どもに対して、特別な保育者が保育するのではなく、

全ての保育者が全ての子どもの保育をプロとして担っている実力をつける、これは今なお難しい課題であるが、当時、奥田らの共通な思いであったと考える。これまでいくつもの施設設立にかわり、諸外国の進んだ障がい児教育実践を視察してきていた稲垣や、現場での教育実践に力を注いだ留目も同じ思いであったに違いない。

「稲垣是成先生 医学博士

… (中略) … 大学の主事として、教授として保育科では障害児保育について広い視野から学生の指導に当りました。ゼミナールでは、新しい施設が札幌市近郊に完成すると、学生と施設見学をしてリハビリテーションの必要性や早期治療の話をしておりました。… (中略) … 」(3頁)

幼稚園での柔軟な実習が困難であることが明らかとなり、保育科の進むべき道は保育園設立へと自ずと集約された。設立するのはノーマライゼーションの思想に裏打ちされた障がい児保育実践園であり、保育園であると同時に保育者養成の実習園として保育者の専門性向上に寄与する役割を持った施設となる。札幌市における障がい児指定園第1号としての意義は大きく、札幌市においても待ち望んだ施設であった²⁹⁾。奥田、稲垣、留目らを中心とした保育科の保育園設立計画は困難が伴いつつも着々と進められた。実務は若い留目が担い、保育室設計に関しては沖津も関与した。

「留目金治先生

… (中略) … 保育科では児童福祉、社会福祉を担当され後に保育科主任教授になられました。多用の中、開設が決定的になった羊丘藤保育園設立に関する諸々の業務を担当されました。特に助成金に関する業務は難題で、お疲れでしたが黙々と進め、一言も疲れを漏らされることはありませんでした。東京の競艇の事務所からは授業中でも電話が入り、教室まで連絡に私は階段を駆け登ったのを忘れる事ができません。先生も電話口まで走りました。先生が就任されてから学生の保母希望者が増え始めました。」(4頁)

順調に進んでいた保育園設立に保育実践者不在の問題が起こる。開園までの様子は次のように記されている。

「保育実践者 沖津圭子

設立関係者の方々は統合保育を修道院の方が実践されると思っていらしたようですが、思いが大きく外れ、そのうえ4月1日開園予定の計画が札幌市からの要請で3月1日に早まり騒ぎが起きました。昭和50年1月10日、突如留目先生に呼ばれ、実践者がいない事情を知らされました。大そうお困りのご様子でした。(月給50万円なら担当してよいと言った女性がいたことも伺いました)

保育学・保育実習・乳児保育Ⅱ・健康等々担当の私はためはずその席で快諾をし、急遽私が実践することになりました。学長山下二枝先生から『無理ではありませんか』と2度ご心配を頂きました。卒業試験終了の翌日から、採用になった学生と入園の準備を始めました。

社会福祉法人藤の園理事長多田春代先生が園長に決まり、私は理事長より非常勤講師の辞令を頂きました。経理は他の福祉施設から月2回夕方方に来られ、事務処理を1年して頂きました(男性)。この年、私は短大保育科2年目学生の担任をしていましたので3月1日の開園によって、短大の卒業式に出席することができませんでした。新採用の保母さんは式に出席のため欠勤となりましたので藤幼稚園長宇山銈子先生と6歳の女兒が応援に来ました。障害児の昼食(給食)は時間を要しますが女兒が対応し仲よく食べていました。上手な付き合い方に驚き今でも忘れられません。相手に対する気持ちの持ち方を教えられました。

「すべての子どもが能力に応じて整えられた環境でくつろいで友達と、時には一人で遊べるのが何よりの幸せ」を根底に置き職員一致協力で混合保育を進めました。施設の規模別に見た4歳児のあそび研究から段階的に園児数を増やしました。日本古来の保育形態を残しながら、年齢の壁を可能な限り取り、遊び、寝て、3歳未満児の食事は特別配慮し、屋外、室内遊びも出来るだけ自由に、北国の混合保育に取り組みました。

1年に100名の見学者が来られ、混合保育は珍しい保育であったようです。5年経過後、修道院から専任の園長と事務職が着任しました。私は短大保育担当者として学生指導に当たり、非常勤講師(保母)として保育園に関係していましたが、平成15年3月31日退職をしました。」(7-9頁)

「協力の賜もの

札幌市・社会福祉法人藤の園の理事長・学校法人藤学園理事長・藤女子大学、短期大学学長・各々理事の方々の深いご理解、ご協力の大なることは申すまでもありません。

附記

園舎の建設には施設課長北岡富弥様はじめ職員の方々の多大なご協力を頂き昭和49年12月12日落成のお祝いがありました。用務員の方々は床の油塗り、みがきをして下さいました。開園まで無人の園舎を施設課で管理して下さい等多くの方々のご協力があった開設されたことを末永く忘れてはならないと思います。

職務規程・給与規程等々は留目先生が明るいので中心になり、理事長多田春代先生・稲垣先生・私も参加してマリア院の応接室で作制しました。(留目先生はS保育園の理事でした)」(6頁)

このような経過で羊丘藤保育園は開園となる。その後の実践と研究について沖津は2本の論文にまとめている²⁵⁾。論文をまとめる背景には奥田の指導協力があった。

5-3 藤学園理事会と教授会議事録から

羊丘藤保育園設立までの経緯・議論を明らかにするために、学園理事会と教授会議事録を掲載する。

理事会議事録

1973年2月6日 出席：多田、中山、牧野、前田、山北、岩城、山中、クレメンス、宇山

5. その他 (3) 保育科の実習施設がほしい。道に申込み希望の土地を、建物も建ててくれる。補助金と、借入金がある。返済は十分に出来る。最後は学校のものとなる。

1973年3月27日 出席：多田、中山、牧野、前田、山北、岩城、山中、クレメンス、宇山、戸川、森山

6. その他 (ロ) 保育科保育実習施設の設置について(資料添付)経験ある先生が必要である。

※添付資料1

保育科 保育実習施設の設置について

1. 保育実習施設(保育所)設置の必要性

(1) 保育科卒業生の最近の動向として児童福祉施設特に保育所への就職が多くなる傾向にある(全国的傾向)

(昭和45年頃から40%~50%位あり、本年も27名ぐらいあり)

- (2) 年々乳児保育など低年齢児の保育が多くなって来たが、一般の実習では乳児は余り扱わせない。道立乳児院も今年度から実習受け入れを中止した。
- (3) 益々保育困難な児童が増加しており、保母に対する高度な技術が要求されてきている。例えば情緒障害児、知能又は身体発育遅滞児など、更にこれら障害児や病時保育の要望も高くなっている。
- (4) 保母教育2年から、3年ないし4年になる姿勢にあることから実習施設による実習、実験、研究の場が必須の情勢にある。
- (5) 新年度から開設される臨床心理学の実験実習施設としても大事な施設であること。

2. 施設設置の方法(案)

(1) 設置の年度及方法

札幌市の保育所整備計画の中に入り、昭和49年度に設置する。即ち札幌市においては民間保育所の設置に対しては、土地(300~400坪程度)の無償貸与と保育所建築費の40%補助することになっている。

(2) 建設費財源

前記札幌市補助金40%と共同募金、年賀はがき、競馬、競輪、船舶振興会などからの補助金を獲得する。

(3) 残金は社会福祉事業振興会から20年償還で借入れする。

(4) 返済償還の方法

自由契約収入(措置児の10%)

月 $50,000 \times 12 = 600,000$

園長寄附金(学校と兼務職員による)

月 $30,000 \times 12 = 360,000$

後援会寄付金

合計 1,000,000

以上の返済費があれば1000万円以上の借入金は確保できる

3. 建築計画並に場所

- (1) 札幌市の整備計画にのり設置申請をして採用された後、具体的計画を立案するが、児童定数120名、0才児保育、障害児保育を含む計画を持ちたい。
- (2) 設置場所は市側の土地確保による。

4. 請願、申請期日

- (1) 札幌市への申請は2月初旬までとなっているが48年度分8ヶ所(予定新建)に対して20以上の申請が出、土地所有者などは優先されるので割り込む余地はない。
- (2) 共募、船舶競輪、競馬等は9月までに申請しなければならない。

以上

※添付資料2 (事例)北の星東札幌保育園事業計画書(吾田略)

1973年5月31日 出席：多田、中山、牧野、前田、山北、岩城、山中、クレメンス

4. その他(2)短大保育科実習のため保育所申請について

札幌市長宛社会福祉法人藤の園の施設として申請するが、同法人理事会にかけるべきであり、本日は学校法人が必要であるという意見の交換程度であった。

※ 添付資料(申請書案)

札幌市長 板垣武四殿

社会福祉法人藤の園
理事長 中山 多賀
保育所設置希望申請書

社会福祉法人藤の園は昭和49年度札幌市において、別紙の主旨、目的並びに計画書にもとづいて保育所を設置したいので申請いたします。

1. 保育所設置の主旨並びに目的

藤女子短期大学は昭和30年、保育科を設置し、幼稚園教諭及び保母の養成につとめ、既に17回の卒業生を送り出しておりますが、卒業生の多くは幼稚園に勤務するため、在学中に実技実習指導の場としては、藤幼稚園を活用しその要求を満たしております。然し最近数年間の就職状況を見ますと、札幌市の保母採用試験合格者だけでも毎年10名以上で、その他全道各地の保育所保母として勤務する者は、卒業生の半数以上となります。従って対象児童も乳児は勿論、情緒障害児、心身障害児など、現場における実地の教育、指導なくしては周囲の期待に答えるに十分な保育技

術を習得させることが困難となってきました。

よって社会福祉法人藤の園は保育所を設置経営し、藤女子短期大学に新しい時代に対応する社会的保育のあり方、心身障害児保育の方法等を研究し実習する場として活用させることを主旨といたします。

2. 定員規模

90名定員とし、外に若干名の心身障害児を保育したい。

3. 設置者歴

ドイツ、ハノーバーの聖ゲオルギオのフランシスコ修道女会は、日本支部を札幌に設置し、藤学園をはじめ多くの幼稚園を設置するとともに、青森県、岩手県において、保育所、養護施設、養護老人ホーム等の社会福祉施設を設立経営してきましたが、本道においても社会福祉法人藤の園を設立して、月形町に養護老人ホームを経営して今日に到っております。今回申請しました保育所も社会福祉法人藤の園の設立経営とするものであります。

4. 建築及び資金計画(吾田略)

5. 理事機構

理事長 中山多賀
理事 牧野キク 稲垣是成 宇山銈子
清水鎮代 小柳重広 山下二枝
留目金治
監事 林 信夫 小野広居

6. 園長予定者

牧野キク

7. 開設場所

札幌市の保育所設置計画に一任しますが、なるべく藤女子短期大学に近距離の地点を希望します。

8. 用地

札幌市からの貸与を希望します。

以上。

1973年6月26日 出席：多田、中山、牧野、前田、山北、岩城、山中、クレメンス、宇山

2. 大学関係 保育所について

社会福祉法人の経営となるので名前を貸す。しかし経営と人事は学校法人でしてほしい。法人格が違うのでむずかしい点がある。大学と保育科で責任を持つ。これにつき保育科の関係者と相談する。(シスターはこれまで相談

を受けていない由)

教授会議事録

1973年10月17日

7. 保育実習のための保育所の設置計画について

関係各方面の協力を得て計画をしている。保育実習、身障児実習等の意欲も学生にあり、実現を期したい。必要額の3/4は市の補助、1/4は20年返還で借用する。(留目先生)

1975年3月1日

報告事項3. 羊ヶ丘藤保育園の開設について

学長より別添資料により報告あり。特に保育科学生の実習施設を目的として開設したこと、保育科の沖津先生が保母として一定時間勤務すること等について説明があった。

※ 別添資料²⁷⁾

6. 教育の科学化

本論は、戦後の一時期、藤女子短期大学の教員として赴任した奥田三郎、稲垣是成、留目金治の足跡をたどり保育者養成における実践教育の必要性の中で、羊ヶ丘藤保育園が誕生した経緯を示した。

その中で、明らかになったことは以下の7点である。

第一に、当時の北海道における子ども、とりわけ障がい児やハンディをかかえた人たちの教育・福祉実践および研究の中心を担っていたのは北大教育学部の城戸を中心としたグループであり、実践者かつ研究者であった奥田らが、現場の実践研究を牽引していた。

第二に、彼らの北海道における取り組み、すなわち現場からの知見を理論化した実践研究のあり方は、北海道内はもとより全国に先進的な取り組みとして発信され、今日に至っていることは、教育・福祉分野における城戸、奥田、留岡らの位置づけからも明らかである。

第三に、彼らの実践を支えた教育哲学は、子どもやハンディをかかえた人々の生き辛さに向き合い、具体的な問題を解決し、生活が豊かになるあり方を模索した生活に還元される生きた教育であった。

第四に、教育実践の充実のために、研究者養成

と教員・保育者養成を主眼においていた。

第五として、彼らに学び、共に北海道の教育・福祉行政や実践を担った稲垣、留目の現場主義と教育の科学化を目指したあり方は、保育者養成の中にも根付いていた。

第六に、保育者養成の中に養成の理念としての人間観や教育観を反映した人材を配置し、実践教育重視の養成を行っていた。

最後に、戦後の北海道の保育者養成を支えた人々は、確固とした哲学を持ち、人間と人間の生活を中心に据えた教育を行なう志があり、その実践のために実践記録をまとめながら科学的な視点を常に追及した。その背景には困難に向き合う人間に寄り添う、深い人間観があった。その実践の中には、その教育・福祉の堅固なまでの必要性とそれを貫いた研究者・実践者・行政のつながりがあった。また、これらの実践をすることは、必ずや人間の豊かさにつながるという揺るぎない確信を持っていたということにも注目したい。

その実践・研究はどれも、哲学的な思想に裏付けられ、常に目の前の子ども(人)から学び、こつこつと記録をとるケース研究の積み上げの中で、実践を科学的に分析し理論化すること、理論を実践につなげる専門性向上にほかならない。

こうした奥田らから得られた知見は現代においてもなお、古くて新しい、今なお教育の中心視座にあるのではないかと考える。

教育に対する篤い思いを持った奥田らは、本学においてもただ必要に迫られ声を上げ、それを実行したに過ぎないのかもしれない。

7. おわりに

この調査を通して、当時の北海道の教育・福祉・保育者養成の断片を浮き彫りにしたに過ぎない。しかも十分に調査し尽くしたとは言いがたい。ここで明らかになった教育に対する知見の豊かさは、同時に保育に関する研究の乏しさを露呈した。常日頃、保育者研修で保育者に実践記録を迫る筆者であるが、北海道における保育の記録や保育業績の収集、保育研究を視座に置いた研究の少なさに、筆者を含む保育研究者の課題を見出すのである。しかし、その豊かな取り組みと揺るぎない人間に対する信頼の確信、あるいは哲学的な視座から今日の保育者養成に必要な示唆が得られ、また筆者

を含む保育研究者および実践者の課題も浮き彫りになった。

謝辞

羊丘藤保育園設立に関し、貴重な覚書を複写して頂き、また、聞き取り調査にも快く協力下さった沖津圭子先生に感謝いたします。また、大畑耕一先生、保育科に長く勤務され、奥田先生のゼミ生であった場崎朝子さん、籠山先生の弟子であり、留岡幸助に関する著作をお貸し下さった後藤昌彦先生に感謝いたします。研究の大切さを常日頃から唱え、厳しくも温かく支えて頂いた甲斐仁子先生にも心から感謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 市澤豊著「奥田三郎(1903-1983)年譜」1999年、2000年修正(『北海道社会福祉史研究』第7号所収)2000年。
市澤豊著「北海道の知的障害児教育・福祉人物史研究—奥田三郎論(1903-1983)(その1)戦前期における「治療教育的人間学」論の形成過程—」(『北海道社会福祉史研究』第7号所収)2000年。
市澤豊、室橋春光、諸富隆著「北海道の知的障害児教育実践史研究序説—その源流：奥田三郎(1903-1983)と小金井治療教育所(小金井学園)—」(『北海道大学大学院教育学研究科紀要』83号所収)2001年、25-116頁。
- 2) 奥田三郎著「コスモスの種」(『精神薄弱児研究(113)』所収)1968年。
- 3) 同上。
- 4) 奥田三郎著「留岡君と家庭学校」(『世界』第226号所収)1964年、244-248頁。
- 5) 城戸幡太郎「留岡清男君のこと」(『川上重治写真集家庭学校と留岡清男』所収)1978年、2-5頁。
- 6) 同上。
- 7) 城戸幡太郎「北大教育学部の構想」(『北海教育評論』第3巻7号所収)1950年、524-525頁。
奥田三郎資料の城戸の奥田宛書簡より
市澤豊著「戦後北海道発達障害児教育実践史研究—北大教育学部特殊教育講座と北海道特殊教育研究会の成立と史的役割—」(『人間福祉研究』No.9所収)2006年、29-46頁。
- 8) 保育問題研究の科学化については酒井の詳論がある。
酒井玲子著「城戸幡太郎とその教育・保育論の継承—とくに科学的研究について—」(『北星学園大学文学部北星論集』第47巻第1号所収)2009年、20-40頁。
- 9) 城戸幡太郎「教育学と教育計画」(『北海道大学教育学部紀要』31巻所収)1978年、41-53頁。
- 10) 三宅和夫著「城戸幡太郎先生と児童発達研究の問題」(『教育心理学年報』第29集所収)1990年、10-11頁。
三宅にとって、この幼稚園は北海道に赴任するきっかけとなったものであり、当時は心理学研究の方向が見えず、悩みの種であったことも後に記している。
「それから先生の北大にある古電車の幼稚園(北大幼稚園)についての話が始まったのである。先生が幼児や母親や保育者のことを熱をこめて語られ、心理学研究の批判をされるのを聞いているうちに、私は遠い北国に行ってみようかという気持ちが自分の中で次第にはっきりとしたものになっていくのを感じたのである。……(中略：吾田)……今日でこそ私はよく学生に『将来子どもの教育、心理臨床などの仕事につく者にとって、具体的に個別の事例に継続的にかかわりながら発達の变化を理解していくことを通して、しだいに子どもをみる眼を養うことはとても重要なことで、心理学の方法を習い、心理学の用語を学ぶことだけで子どもを理解することなどはできない。現実の生きた子どもの姿にふれることこそ大切なのだ』などともっともらしいことを言うが、当時幼稚園で午前中子どもたちとあそび、午後母親と話をしたり家庭訪問をしながら、これで一体いつになったら心理学の論文が書けるだろうか、などと深刻に悩んだことを告白しなければならない。」(『発達研究に関するノート：城戸先生との出会いとかかわらせて』(『北海道大学教育学部紀要』第48号所収、1986年、1-15頁。)より。
- 11) 市澤によれば、奥田の社会的治療の概念形成は、城戸や留岡の民生教育論や生活教育論より早い時期に開始され、二者の論とは異なる論述であり、学術的な独自性を帯びたものとして展開されており、これらの啓発を受けたものとは言えない、としている。(『北海道の知的障害児教育実践史研究序説』)
間宮も、三者の共同研究と実践という観点から城戸の研究実践を顧みられるべき、としている。(間宮正幸著「今日の間宮発達科学と発達教育臨床の研究—城戸構想」から『子ども発達臨床研究センター』へ」(『北海道大学大学院教育学研究科紀要』第100号所収)2007年、3-24頁。)
- 12) 奥田三郎著「『子どもの自殺を思う』を読む」(『北海教育評論』第9巻第1号所収)1956年、38-40頁。
同じ手記を読んで留岡は「責任と原因の分離について—吉田先生の手記を読んで—」(同、40-41頁)の中で「むしろ、責任観念が強ければ強

- いほど、責任観念だけではどうにもならないから、いきおい原因をつきとめ、それを抑えて、ふたたびそのような結果がおこらないような、準備をかためることを意味するのであります。だから、責任と原因との分離は、責任観念の固執から、原因追求の対策準備への移行を意味します。」と述べ、校長の立場からその責任について述べ、解決を図るために、教員の指導技術を問い直す等、科学的な分析を示唆している。
- 13) 下記の著作がある。
中村光慶、稲垣是成著『戦地から得た大陸の医学』人文閣、1941年。
 - 14) 忍博次他編『夢を追う定時制校長さん—稲垣是成先生の歩み—』稲垣是成先生「北海道開発功労賞」受賞記念誌刊行会、1984年。
 - 15) 工藤孝次著「北海道精神薄弱教育史再考」(『情緒障害教育研究紀要』第12号所収)1993年、1-10頁。
 - 16) 木村謙二著「日本特殊教育学会第9回大会シンポジウム、特殊教育研究の前進のために」(『特殊教育学研究』9(3)所収)1972年、76-77頁。
 - 17) 北海道社会福祉研究会『北海道の歴史と福祉—北海道の開拓と福祉のあゆみ—』2009年、166頁。
 - 18) 留目金治編『児童福祉—保育を学ぶもののために—』相川書房、1982年。
留目金治著「義務教育完全実施における学校教育と児童福祉の接点—第1報教護児童の教育と福祉—」(『藤女子大学・藤女子短期大学紀要』第II部第14号所収)1976年、33-43頁。
留目金治著「教護院の窓から『特殊教育』に思う」(『北海教育総論』第6巻6号所収)1953年、385-389頁。
 - 19) 複数の資料によるが、記録に食い違いがあり、必ずしも正確なものとなっていない。
『藤女子短期大学30年藤女子大学20年記念誌』(1977)、在職記録、『学生便覧』(1963年以降)
 - 20) 『藤女子短期大学30年藤女子大学20年記念誌』(1977)、55頁。留目の在職記録によれば、1955年から藤女子短期大学非常勤講師となっている。しかし、1950年の「施設管理」科目担当の名が教育課程表に存在するため短大以前から非常勤講師を担ったものと考えられる。
 - 21) 三宅和夫、奥山わか子著「幼児の社会的行動の発達に及ぼす成人(教師)の交渉の影響について」(『教育心理学研究』第3巻第2号所収)1955年、65-75頁。
 - 22) 沖津は「羊ヶ丘藤保育園開設の経緯」として2006年4月、元藤女子短期大学保育科教授沖津圭子と署名入りの手書き9枚に渡る覚書を記している。当時の学科の様子を知る唯一の記録である。
 - 23) 札幌市私立幼稚園連合会研究委員長として宇山は1969年、「幼児期の社会性指導について—札幌市私立幼稚園における社会性指導に関する調査(第1次中間報告)—」を共同研究としてまとめている。(札幌市私立幼稚園連合会『昭和44年度研究実績報告』1-22頁。)
北海道私立幼稚園協会では法人設立当初から3年間、1972年まで理事を担っている。(社団法人北海道私立幼稚園協会『北私幼二十周年記念誌』1990年、54頁。)
宇山銈子著「幼児期の体力づくりにおける家庭の役割—昭和56年度の藤幼稚園在園児についての調査を中心として—」(『藤女子大学・藤女子短期大学紀要』第19号(第II部)所収)1981年、65-73頁。
宇山銈子著「幼稚園教育と3歳児」(『北海道における幼稚園教育の現状と課題—第29回日本私立幼稚園教育研究大会記念』所収)1982年、29-35頁。
 - 24) 1960年、札幌市では未就園児の増加に幼稚園設立が追いつかず、苦肉の策として仲よし子ども館を始めた。保母は全員札幌市の公務員であり、親子を週に1~2度、無料で保育を行った。保護者からの評価が高く、後に子どもが減少し私立幼稚園との園児獲得との問題になった。
吾田富士子、山田りよ子、甲斐仁子著「札幌市「仲よし子ども館」の果たした役割と今日への示唆—地方行政と子育て支援の視点から—」(『保育士養成研究』第24号所収)2006年、19-28頁。
吾田富士子、山田りよ子、甲斐仁子編『札幌市「仲よし子ども館」関連資料』(2005年度藤女子大学研究奨励助成金受託)2007年。
 - 25) 『はばたき—札幌市の障害児保育—』札幌市民生局1992年。(この中に、次の論文が集録されている。沖津圭子著「障害児保育の草創期を振り返って」13-18頁)
吾田富士子、今博子、渡辺寿子著「保育者養成の課題3—羊ヶ丘藤保育園設立と保育所実習指導から—」(『藤女子大学紀要』第II部第45号所収)2008年、67-75頁。
 - 26) 沖津圭子著「保育所における障害児保育—混合保育の実践を通して—」(『藤女子大学・藤女子短期大学紀要』第II部第14号所収)1976年、45-60頁。
沖津圭子著「保育所における障害児保育II—混合保育の実践を通して—」(『藤女子大学・藤女子短期大学紀要』第II部第34号所収)1996年、43-54頁。
 - 27) 羊ヶ丘藤保育園事業の目的、施設のあらまし、平面図等。
参考：社会福祉法人藤の園 羊ヶ丘藤保育園『羊ヶ丘藤保育園25年のあゆみ』1999年。